

東北地理学会 2018 年度第 1 回研究集会

「東北の次世代観光交流」研究グループ 第 2 回研究集会

『観光の組織化』は東北をどう変えるか

日 時：2018 年 10 月 28 日（日） 13：00～16：30

場 所：青森市港湾文化交流施設 八甲田丸

参加者：約 30 名

2017 年度に結成された「東北の次世代観光交流」研究グループ（代表者：山田浩久，山形大学）は，2018 年度に研究課題「『観光の組織化』と地域構造変容のダイナミズムに基づく次世代観光戦略の構築」（研究代表者：山田浩久，山形大学）で科学研究費補助金の採択を受けた【基盤研究（B）（一般），2018 年度～2021 年度】。

そこで，2018 年度の活動の一環として，「観光の組織化」が次世代の観光交流に与える影響を考え，それが東北の地域社会の変容に結びついていく過程を明らかにするとともに，個々の取り組みから共通の目的を目指す集団の取り組みへ，さらにその効率化へと変化していくことが求められる東北の今後を地域側の視点から展望するシンポジウムを開催した。

研究グループとしては，2017 年 9 月に続く 2 回目の研究集会となる。

当日のプログラムは下記のとおりである。

1. <開会あいさつ>13:00～13:10

宮原育子（前東北地理学会会長・宮城学院女子大学）

2. <趣旨説明> 13：10～13：30

山田浩久（研究グループ代表者・山形大学）「進展する『観光の組織化』」

3. <基調講演> 13：30～14：30

「意識・組織変革で青森県観光をどう変えるのか」

高坂 幹 氏（公益社団法人青森県観光連盟 専務理事）

<休憩>14：30～14：45

4. <研究報告> 14：45～15：45

櫛引素夫（青森大学）「北海道新幹線開業を契機としたフェリー各社と陸上の連携」

初澤敏生（福島大学）「会津若松まちづくり株式会社による歴史・文化発信事業」

岩動志乃夫（東北学院大学）「官民学連携による秋田県大仙市のインバウンド観光地形成」

5. <総合討論>15：45～16：30

司会：山口泰史（フィデア総合研究所）

趣旨説明となる山田報告では，東北地方の観光圏整備が今一つ低調だったことから，今後は DMO に活路を見出す必要があり，1 つのきっかけとして山形空港へのプログラムチャーター便が「観光の組織化」につながると指摘した。一方で，台湾を中心とするチャーター便は発地側（台

湾)が企画する“アウトバウンド”であり、受入側(山形)が提案する“インバウンド”ではないとの問題提起もなされた。

続いて、元青森県観光国際戦略局長で、現在は公益社団法人青森県観光連盟の専務理事を務める高坂幹氏による基調講演が行われた。高坂氏は、観光連盟はいわゆる受け身的な「イベント屋」ではなく能動的な「仕掛け屋」であるべきだと説き、具体的事例として、ベンチャー企業と連携しながら ICT や AI を取り入れた先進的なインバウンドサービスに取り組んでいる様子などを紹介した。

休憩を挟んだ後は3件の研究報告が行われた。

最初の櫛引報告では、北海道新幹線の開業によって観光空間が拡大する中、ポジティブな面だけでなくネガティブな面も露呈され、それらをどう克服するかが重要だと述べ、同時に、長らく時代をけん引してきたフェリーも鉄道と連携したりしながら独自の営業戦略で奮闘している状況を明らかにした。

続く初澤報告では、これまであまりまちづくりに関わる事がなかった「博物館」が会津若松のまちなか観光に深く入り込んでいる実態を紹介し、白虎隊など城下町のイメージに隠れがちだった会津若松の商人文化が復興することで関係者がプライドを取り戻し、コミュニティの再生が図られたと指摘した。

最後の岩動報告では、人口減少が深刻な秋田県大仙市を事例に、全国区の大曲花火を核として地域資源の見直しが行われ、その過程で地域活性化に取り組む協議会が次第に組織化されていくプロセスを詳説するとともに、それまで積み上げたものをどう次世代に引き継ぐかが今後の大きな課題と指摘した。

全ての報告・講演を終えた後で、フロアと報告者による全体討論が行われた。そこでは、「組織化」をどのように位置づけるか、具体的にはスケールメリットを追求して機能の高次化を図ることなのか、今まで手を組むことがなかった複数のステークホルダーが連携して新たなスタイルを構築していくことなのかといった議論や、「組織化」によって地元がどのように変わる、あるいは変わらないことが望ましいのかといった議論などが交わされた。

会場は終始熱気に包まれ、大変実り多いシンポジウムとなった。

文責：山口泰史（株）フィデア総合研究所